様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ２８ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２１３３

研究課題名（和文）マネの絵画と検閲　ー政治、社会、美術制度ー

研究課題名（英文）Mane's Painting and Censorship -Politics, Society, Art System-

研究代表者
三浦　篤（MIURA, ATSUSHI）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：１０２１２２２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：マネの絵画と検閲に関して、政治、社会、美術制度という観点から総合的に調査し、考察した。 その結果、マネが第二帝政に批判的な立場から政治的な主題を取り上げ、暗示的なやり方で表現し、検閲を受けたことがわかった。また、ヌードや娼婦のテーマに積極的に取り組んで、それ以前にはない女性表象を行い、スキャンダルや非難を招いたこと、さらに聖性を帯びるべきキリスト像をリアリストのまなざしで扱って批判されたことも判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は19世紀フランスの重要な画家マネの作品を検閲という新しい視点で研究した。絵画が単に美的な性質を持つだけではなく、政治や社会、道徳や宗教などと深く関連していることは、必ずしも常に意識されているわけでない。その意味で、この研究成果はマネ研究を一歩進める学術的意義を有している。さらに、成果を書籍として刊行することによって一般の人の美術に対する見方を変えることにもつながり、その意味で社会的な意義もある。

研究成果の概要（英文）：We comprehensively researched and considered Mane's paintings and censorship from the perspective of politics, society, and the art system. As a result, it turned out that Manet took up the political subject from a position critical to Second Empire, expressed it in an implicit manner, and was censored. It also became clear that actively working on the themes of nudes and prostitutes, he was also criticized for making problematic female representations which caused scandals and accusations, and treating the image of Christ who should be holy with the eyes of a realist.

研究分野：人文学

キーワード：マネ　検閲　政治と美術　ヌードとスキャンダル

１．研究開始当初の背景

エドゥアール・マネは19世紀フランス絵画史における重要な画家であり、さまざまな研究があるにもかかわらず、結局、現代生活を描く画家、モダニズムの画家というイメージから大きく出てはいない。近年では社会史的、精神分析的、ジェンダー論的など、人文科学の他分野の方法論を生かしたアプローチが試みられているが、必ずしも説得力のある解釈にまで到達しているわけではない。本研究では、スキャンダルを起こした問題作も描くマネを、検閲というこれまでにない視点で研究することにした。意識的であれ、無意識的であれ、政治的、宗教的、道徳的等の規範に抵触したと思われる作品を中心に調査を行い、新たなマネ像の構築に向かって何らかの貢献ができればよいと思う。

２．研究の目的

本研究の目的は、19世紀フランスの画家マネを「検閲」という視点から解明することにある。《皇帝マクシミリアンの処刑》への検閲や《オランピア》のスキャンダルが象徴するように、マネの絵画は19世紀フランスの市民社会において政治的、宗教的な規範や性表現や禁忌に触れつつ制作されている。その作品は美術の制度と葛藤を起こしながら発表されたり、そこから排除されたりしている。そこには自らの絵画を社会に問い、受容させようとする画家の戦略的な態度を捉えることができよう。マネの生み出す挑発的、問題提起的なイメージの生成と受容の実態を、作品と関連資料、さらには政治、社会、美術制度に関する調査に基づいて分析し、新しいマネ像を浮かび上がらせたい。

３．研究の方法

本研究の調査は政治主題、性表現（裸婦、娼婦、男女関係）、宗教に関係したマネの作品と資料の調査を基本とし、それに当時の政治、社会、美術制度に関する文献・図像調査を加える。フランス（パリ）、イギリス（ロンドン）、ドイツ（マンハイム、ハンブルク）、スイス（チューリッヒ）、アメリカ（ワシントン、ニューヨーク、ボストン、フィラデルフィア、シカゴ）の美術館が所蔵するマネ作品と関連資料を精査し、さらにパリのフランス国立図書館、オルセー美術館、国立美術史研究所で詳しい資料調査を行った。以上の成果を基に、マネとその作品を「検閲」という観点から具体的に分析し、画家の戦略的な態度と作品の特異な造形性を解明するとともに、新たな歴史的位置づけを試みた。

４．研究成果

平成27年度は、政治主題関連作品に関する調査旅行、作品と資料の分析を行った。 第1回目の調査旅行はロンドンのナショナル・ギャラリーで《皇帝マクシミリアンの処刑》(第2作)と《テュイ ルリーの音楽会》を実地調査し、作品に関する資料を収集した。次いで、パリのフランス国立図書館で当時の新聞雑誌記事とマネが受けた検閲の調査を行い、フランス国立美術史研究所では第2帝政、第3共和制初期の美術行政制度に関する補足調査を行った。分析した結果、《皇帝マクシミリア ンの処刑》はマネも含めた第2帝政期の共和主義者たちにおける反ナポレオン3世の政治的立場を示唆した作品であり、それを感じ取った内務省から圧力がかかり、マネの生前にフランス国内で展示することができなかった。それに対して、マネは同主題 のリトグラフを発表しようとしたが、それも差し止められた。明らかに政治的な検閲を受けたのである。また、初期の《テュ イルリーの音楽会》にも構図、人物、モチーフ、様式などを総合的に判断すると、体制批判の微妙な暗示を読み取ることが可能であり、検閲をかいくぐるマネの戦略的態度が想定される。

平成28年度は、第1回調査旅行では、マネの政治主題関連作品として、ハンブルク美術館で《ロシュフォールの肖像》、チューリッヒ美術館で《ロシュフォールの脱出》を実地調査し、作品に関する資料を収集した。折よくハンブルク美術館で大きなマネ展が開催されており、性表現関連作品として重要な《ナナ》を含め、かなりの数のマネ作品を同時に調査できたのは幸運であった。アムステルダムのゴッホ美術館で19世紀の娼婦をテーマとした展覧会が開かれていたのも幸運で、パリのオルセー美術館で性表現関連作品として《草上の昼食》、《オランピア》を改めて調査したこととも合わせて、娼婦の表象に関する理解を深めることができた。性表現関連作品として、ワシントンのナショナル・ギャラリー所蔵の《オペラ座の仮面舞踏会》がハンブルクのマネ展で調査できたこともあり、当初予定していた第2回調査旅行(ニューヨーク、ワシントン)は行わなかった。分析の結果、コミューン派の流刑者で恩赦されたロシュフォールをモデルにした作品を即座に制作したことは、共和主義者マネのやや過激な政治性を表していることがわかった。また、娼婦や男女遊楽の図像を描いた主要作は、当時の娼婦とそれに境を接する女性たちの生態と関連はあるものの、画家の意図は微妙であり、特異な絵画表現も含めて今後のさらなる調査研究が必要と思われた 。

平成29年度は、ワシントンのナショナル・ギャラリーにおいて海外調査を行った。性表現主題関連作品として《オペラ座の仮面舞踏会》を、政治主題関連作品として《老音楽師》を実地調査し、当該作品に関する資料を収集した。分析した結果、《オペラ座の仮面舞踏会》は華やかな主題の中に売春のテーマが含まれている点が、構図、彩色、筆触の独自性とともに、サロンで落選した理由であると解釈できた。《老音楽師》はナポレオン3世のパリ改造計画の影の部分に対するマネの冷静なまなざしがうかがわれ、《テュイルリーの音楽会》とは逆にパリの場末の周縁的、境界的なイメージであることが判明した。後半は、《草上の昼 食》、《オランピア》、《フォリー・ベルジェールのバー》に関する、

当時の批評記事を読み込むことに力を傾注した。 さらに、今回の研究成果も反映させた、マネに関する単著の刊行を目指して執筆を進め、約8割の原稿を書き上げた。

平成30年度は、アメリカに海外調査に行き、ボストン美術館でマネの《皇帝マク　シミリアンの処刑》の第1ヴァージョンを、メトロポリタン美術館(ニューヨー　ク)で《死せるキリストと二人の天使》《エスパダの衣装を着たヴィクトリーヌ嬢》を調査し、資料収集を行った。帰国後、平成27、28、29年度の調査研究の成果も合わせて、マネの絵画と検閲という問題を政治、社会、美術制度という観点から総合的に考察した。　その結果、マネが第二帝政に批判的な立場から政治的な主題を取り上げ、暗示的なやり方で表現していること(特に《皇帝マクシミリアンの処刑》　《テュイルリーの音楽会》)、スキャンダルを起こしつつもヌードや娼婦のテーマに積極的に取り組み、それ以前にはない女性表象を行ったこと(特に《草上の　昼食》《オランピア》《フォリー=ベルジェールのバー》)、さらに聖性を帯びるべきキリスト像をレアリストのまなざしで扱って批判されたこと(特に《死せ　るキリストと二人の天使》《兵士たちに侮辱されるイエス》)などが判明した。　それらの成果は、平成30年に刊行した著書『エドゥアール・マネ、西洋美術史の革命』(KADOKAWA)の中に組み込んで公表した。本書は、日本で初めてのマネに関する本格的なモノグラフで、「過去からマネへ」「マネと〈現在〉」「マネから未来へ」という三部構成となっている。西洋絵画史を原作や複製を通して学習し、イメージの自由自在な組み合わせによって、独自の冷徹なレアリスム絵画を発表したマネ芸術の意義、さらに後世の画家たちへの多大な影響について論述した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計10件）

1．Miura Atsushi « The Triangle of Modern Japanese *Yōga* - Paris, Tokyo, East Asia - », Toshio Watanabe and Eriko Tomizawa-Kay (ed.), *East Asian Art History in Transnational Context*, 2019, pp. 65-82（査読有）

2．三浦篤「モネの《草上の昼食》―レアリスムと印象派のはざまで」『プーシキン美術館展』図録、2018年、p. 142-149（査読無）

3．三浦篤「西洋留学と明治洋画」『國華』1467号 特輯「西洋留学と明治洋画」、2018年1月20日、p. 27-44（査読有）

4．Miura Atsushi « Collectionneurs japonais de peinture moderne française au début du XXe siècle », *Chefs d'œuvre du Bridgestone Museum of Art – Ishibashi Foundation*, cat. exp., Musée de l'Orangerie, 2017, p. 22-41（査読無）

5．Miura Atsushi « Séparation et résonance: peinture et écriture en Occident et en Etrême-Orient, Deux Japonaiseries de Vincent van Gogh », Pierre Marc de Biasi et Anne Herschberg-Pierrot, *L'œuvre comme processus*, Paris, CNRS, 2017, p. 323-328（査読有）

6．三浦篤「マネとベラスケス受容 - 近代絵画への遺産」、公開国際シンポジウム報告集『ベラスケスとバロック絵画：影響と同時代性、受容と遺産』ベラスケス・シンポジウム事務局、2016年、p. 53-61（査読有）

7．三浦篤「黒田清輝とフランス絵画」『生誕150年　黒田清輝』展カタログ、東京国立博物館、2016年、p. 37-44（査読無）

8．Miura Atsushi « Japan and the Impressionists. The Collections of French Painting and the Interrelation between French and Japanese Art », *Japan's Love for Impressionism, From Monet to Renoir*, Exh. Cat., (Kunst-und Ausstellungshalle der Bundesrepublik Deutschland, Bonn), München, Prestel, 2015, p. 12-27（査読無）

9．Miura Atsushi « La construction de l'histoire de l'art au Japon à travers les échanges franco-japonais », *Perspective*, INHA, 1/2015, p. 133-152（査読有）

10. 三浦篤「マネとマラルメ、絵画と詩の共鳴」、マリアンヌ・シモン＝及川編『詩とイメージ』水声社、2015年、p. 21-45（査読有）

〔学会発表〕（計17件）

1. 三浦篤「19世紀フランス絵画史におけるドービニー」、ドービニー展記念シンポジウム、山梨県立美術館、2018年11月17日

2. Miura Atsushi « Collectionneurs japonais de peinture moderne française dans la première moitié du XXe siècle », Colloque international: La formation et la diffusion des collections d'art français dans les espaces globaux, 1870-1950, Université de Tokyo, 21 septembre 2018.

3. 三浦篤「西洋の戦争表象とその広がりー19世紀フランス絵画から藤田嗣治の戦争画へ」、第44回大原美術館美術講座　シリーズ戦争と美術Ⅱ　東西・古今、倉敷国際ホテル、2018年7月28日

4. 三浦篤「クロード・モネの《草上の昼食》–その謎と魅力について」、『プーシキン美術館展』記念講演会、2018年6月2日

5. 三浦篤「8Ｋ映像と美術品撮影 - ルーヴル美術館の場合」、第10回恵比寿映像祭関連シンポジウム「映像のヴィジブル／インヴィジブル」、日仏会館ホール、2018年2月15日

6. 三浦篤「一高歴史画と西洋画法–フェノロサの教えとの関わり」、東京大学駒場博物館第一高等学校絵画資料修復記念「知られざる明治期日本画と『一高』の倫理・歴史教育」展記念シンポジウム、東京大学駒場キャンパス国際交流ホール、2017年12月2日

7. 三浦篤「19世紀フランス美術における古代美術の受容–アカデミスム、ヴィラ・メディチ、そして前衛へ–」、シンポジウム「近世・近代の古代美術受容と歴史観の形成」名古屋大学人文学研究科総合棟７階カンファレンスホール、2017年11月25日

8. 三浦篤「８K映像と美術史研究の可能性　―ルーヴル美術館の作品を例に」、国際シンポジウム「デジタルと芸術」、東京大学駒場キャンパス、学祭交流ホール、2017年11月17日

9. 三浦篤「近代フランスにおける革命と画家たち革命の近代–普仏戦争、パリ・コミューンを中心に–」、講座「革命の近代」、鹿島美術財団、2017年10月13日

10. 三浦篤「近代日本画と西洋絵画」、「狩野芳崖と四天王　近代日本画、もうひとつの水脈」展記念講演、福井県立美術館、2017年９月23日

11. Miura Atsushi « The Politics of Contemporary Japanese Paintings: From the history paintings of former Number 1 High School to the war paintings of Tsuguharu Fujita », International Workshop on Reflective Transitions of Politics in Japanese Art, University of East Anglia, UK, 24 August 2017.

12. Miura Atsushi « Japon et impressionnisme, Peinture japonaise moderne et collections de tableaux impressionnistes au Japon », 12e colloque de la Société Française des Etudes Japonaises, Autour de l'image: arts graphiques et culture visuelle au Japon, Université Jean Moulin, Lyon 3, 15-17 décembre 2016.

13. Miura Atsushi « Le musée imaginaire des impressionnistes au Japon à travers les projets de musées dans la 1ère moitié du XXe siècle », Colloque: Portrait intérieur, Le musée imaginaire des impressionnistes, Musée des Beaux-Arts de Rouen, 7 et 8 septembre 2016.

14. 三浦篤「日本における印象派コレクションの形成　―林忠正、大原孫三郎、松方幸次郎を中心に」、メアリー・カサット展記念シンポジウム「印象派のひろがり」、横浜美術館、2016年7月31日

15. 三浦篤「ファンタン＝ラトゥールと音楽」、国際シンポジウム「芸術照応の魅惑 – 近代パリにおける文学、美術、音楽の交差」、日仏会館、2015年11月7日～８日

16. Miura Atsushi «日本近代洋画のトライアングル – フランスから東アジアへThe Triangle of Japan's Modern Yōga: Paris, Tokyo, East Asia », International Conference: Deconstructing boundaries: Is 'East Asian Art History' possible?, Khalili Lecture Theatre, SOAS, University of London, 10th and

Sunday 11th October 2015.

17. Miura Atsushi « La réception de la peinture académique au Japon », Colloque: Jacques Thuillier, Pensée et écriture de l'art, Institut national d'histoire de l'art, Paris, 19-20 juin 2015.

〔図書〕（計4件）

1. 三浦篤『エドゥアール・マネ　西洋美術史の革命』KADOKAWA、2018年

2. 三浦篤『西洋美術の歴史、19世紀：近代美術の誕生、ロマン派から印象派へ』（尾関幸、陳岡めぐみと共著）、中央公論新社、2017年

3. 三浦篤『西洋絵画の歴史３、 近代から現代へと続く問いかけ』小学館、2016年

4. 三浦篤『まなざしのレッスン ２.西洋近現代絵画』東京大学出版会、2015年

〔産業財産権〕
○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
https://sites.google.com/site/miura1832/

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。